

Feel the JIHS Plus

「Feel the NCGM」から「Feel the JIHS」へ



国立健康危機管理研究機構

広報管理部通信

2025.6.26

Vol.1

3月～5月（季刊）



2025年4月1日

「国立感染症研究所」

と

「国立国際医療研究センター」

は統合し、

「国立健康危機管理研究機」

が発足しました。



学校法人 北里研究所
北里柴三郎記念館 提供



文京区立森鷗外記念館 提供



Japan Institute for Health Security

CONTENTS

- 02 JIHS国土理事長からのメッセージ
- 04 JIHS脇田副理事長からのメッセージ
- 06 JIHS設立記念式典を開催しました
- 08 国立看護大学校にて卒業式/修了式/入学式が開催されました
- 10 DMAT:活動レポート(ミャンマー中部で発生した地震支援に参加して)
- 11 主なできごと

令和7年度 感染症危機管理リーダーシップ研修(長期)開会式 / SIP第3期 公開シンポジウムを開催

AYA世代がん患者を応援するAYA Weekのイベント開催 / 国立音大附属中学校合唱部OGの皆さんによる合唱コンサート開催 / 国府台病院「児童精神科」のご紹介 / 4月25日「世界マラリアデー」

「兵庫からセラピードッグがやって来た！」～5年越しの想いが実った嬉しい日～

国際医療協力局:NEWSLETTER特別号が完成しました / 健康危機に立ち向かう

国立健康危機管理研究機構が設立されました

(Japan Institute for Health Security : JIHSジース)

～北里柴三郎と森林太郎(鷗外) 二人の医学者の ベルリンでの邂逅から137年、そしてJIHSへ～

(寄稿)国立健康危機管理研究機構(JIHS)理事長 国土 典宏

2025年4月1日、国立健康危機管理研究機構（Japan Institute for Health Security : JIHSジース）が、国立感染症研究所（NIID）と国立国際医療研究センター（NCGM）、二つの組織の統合によって設立されました。

国立感染症研究所（NIID）と国立国際医療研究センター（NCGM）にはそれぞれゆかりのある医学者がいます。ひとは、世界的に著名な微生物学者であり教育者でもある北里柴三郎（1853-1931）、ひとは、日本を代表する文豪であると同時に軍医総監として公衆衛生学に貢献した森林太郎（鷗外）（1862-1922、NCGM名誉総長）です。



北里柴三郎は、1886年から6年間ドイツに留学し、ロベルト・コッホに師事し1889年破傷風菌の純粋培養に成功し、さらにその毒素に対する血清療法を確立し、一躍世界的な研究者として名声を博しました。森林太郎（鷗外）は、1884年から陸軍省派遣留学生として4年間ドイツに留学して後半の1年余をベルリンで過ごし、北里柴三郎の勧めもありロベルト・コッホに師事しました。ベルリンの下水中の病原菌について調査したと言われ、現在の下水サーベイランスに繋がる仕事と考えられます。

二人の医学者のベルリンでの邂逅から137年の時を経て、2025年4月1日、それぞれゆかりのある国立感染症研究所（NIID）と国立国際医療研究センター（NCGM）が統合し、国立健康危機管理研究機構（JIHSジース）として新たな歴史を刻み始めました。

国立感染症研究所は北里柴三郎が、1892年に設立した私立衛生会附属伝染病研究所がルーツであり、東京帝国大学附属伝染病研究所（1916年）を経て、戦後は国立予防衛生研究所となり、1997年国立感染症研究所となりました。研究所は名称も所管も変遷をたどりましたが一貫して我が国の感染症研究の中心的役割を果たしてきました。1961年にワクチン検定庁舎（村山分室）が新築され、1981年にBSL4対応※1の実験室も完成しました。1997には1955年に国立らい研究所としてスタートした国立多摩研究所が支所となり、ハンセン病研究センターとなりました。

一方、国立国際医療研究センター（NCGM）のルーツは、1868年戊辰戦争傷病者のための兵隊仮病院にまで遡ります。その後、陸軍本病院などを経て戦後国立東京第一病院となり、1993年に国立国際医療センター、2008年に国立研究開発法人国立国際医療研究センターとなりました。2001年には東京都清瀬市に国立看護大学校が設立され、卒業生の約90%が6つのナショナルセンター※2に入職しています。また、JIHSが有するもう一つの総合病院、国立国府台医療センター（旧国立国際医療研究センター国府台病院）も歴史は古く、1872年に東京教導団兵学寮病室として設立され、国府台陸軍病院を経て戦後は国立国府台病院、2008年に国立国際医療研究センター国府台病院となり、NCGMの2つ目の病院となりました。さらに、1920年結核患者のために東京市療養所として建設された国立中野療養所は国立療養所中野病院を経て1993年廃院となり国立国際医療センターに統合されました。JIHSは、国立感染症研究所と国立国際医療研究所の二つの研究所、国立国際医療研究センターと国立国府台医療センターの二つの総合病院、看護人材の育成を担う国立看護大学校、さらに、臨床研究センターと国際医療協力局、6つの事業部門と、それら事業部門を支える統括部門という体制でスタートいたします。DMAT※3事務局もJIHSに移設されました。それぞれの部門には、感染症に限らない研究プロジェクトや、保健医療人材の育成、国際協力や公衆衛生などに携っている多様なバックグラウンドを持つ専門家が多数います。

JIHSは、まさに、様々な健康危機から国民の皆さまを守ることのできる総合医療研究機関であり、その役割を担いうる人材がいる組織であるということに他なりません。統合する二つの組織の長い歴史を踏まえ、培ってきた組織文化、積み上げてきた歴史、実績を互いに尊重しながら、国民の皆さまから期待されるミッション「感染症その他の疾患に関する調査・研究の実施や医療の提供を通じて安心できる社会の実現に貢献する」を常に念頭に、「世界トップレベルの感染症対策を牽引する『感染症総合サイエンスセンター』として、基礎、臨床、疫学、公衆衛生、社会科学にわたるすべての領域研究を統合的に推進し、最先端の医療と公衆衛生対策を提供する」をビジョンに掲げ、時代と社会の要請に適確に対応しながら、レジリエントな社会の実現に力を尽くしてまいりたいと思います。今後とも変わらぬ皆さまのご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

※1 細菌・ウイルスなどを取り扱う実験施設の分類。取り扱うことのできる病原体の危険度は、致死性、感染性、伝搬様式、病原体の自然界での生存能力などから4つのレベルに分けられている。もっとも厳しい基準がBSL-4。

※2 旧国立国際医療研究センター、国立がん研究センター、国立循環器病研究センター、国立成育医療研究センター、国立長寿医療研究センター、国立精神・神経医療研究センターの6つの国立高度専門医療センター

※3 医師、看護師、業務調整員（医師・看護師以外の医療職及び事務職員）で構成され、大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期（おおむね48時間以内）から活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チーム。災害派遣医療チーム（Disaster Medical Assistance Team）の頭文字をとって略して「DMAT（ディーマット）」と呼ばれている。（厚生労働省DMAT事務局Webサイトより）

より柔軟で強靱な健康危機対応能力を目指して ～国立予防衛生研究所(予研)創設時の総合的な医学研究所へ 発展の構想をJIHSで果たす～

(寄稿)国立健康危機管理研究機構(JIHS)副理事長 脇田 隆字

国立感染症研究所(NIID)と国立国際医療研究センター(NCGM)は、2025年4月1日に統合し、国立健康危機管理研究機構(JIHS)として、新たなスタートを切りました。

副理事長として、JIHSのミッションである「感染症その他の疾患に関する調査・研究の実施や医療の提供を通じて安心できる社会の実現に貢献する」を実現するため、「世界トップレベルの感染症対策を牽引する『感染症総合サイエンスセンター』として、基礎、臨床、疫学、公衆衛生、社会科学にわたるすべての領域研究を統合的に推進し、最先端の医療と公衆衛生対策を提供する」をビジョンのもと、副理事長として職責を果たしてまいりたいと思います。



私は、2018年から国立感染症研究所(National Institute of Infectious Diseases: NIID)の所長を務めてまいりました。

国立感染症研究所は「感染症を征圧し、予防医学の立場から、広く感染症に係わる研究を総合的に行い、国の保健医療行政の科学的根拠を明らかにする」を目的に、感染症研究、レファレンス、サーベイランス、国家検定および検査、国際協力、研修、アウトリーチ活動など広範囲な活動を行ってまいりました。

国立感染症研究所の成り立ちは、77年前、1947年に国立感染症研究所の前身である国立予防衛生研究所(予研)の設立に遡ります。

当時、わが国は終戦後の混乱期にあり伝染病が蔓延、抗生物質やワクチンなどの生物学的製剤を含め医薬品も不足しその質も低下、医療環境が悪化しました。このため抗生物質やワクチンなどの開発と品質管理の向上が喫緊の公衆衛生上の課題でした。当時わが国は占領下にあり、GHQは抗生物質などの国家検定を実施する国立研究所を厚生省(当時)に設立することを企画しました。東京大学(当時は東京帝国大学)の伝染病研究所職員の半数が移転して予研はスタートしました。

予研設置時の機能は第1にワクチンや血清の基準を決めること、第2に伝染病の総合研究計画を立てること、第3に日本の医学界に海外の最新の研究成果を伝え、また日本の研究成果を海外に伝えることとされました。さらに設立当初は、癌研究所、結核研究所、循環器研究所などの併設する国立研究所として構想され、英語名はNational Institute of Healthとしてスタートしました。その後時代のニーズに応じて様々な組織改編がありましたが、感染症の基盤的研究機能、疫学公衆衛生機能、ワクチンなどの品質管

管理機能を担ってきました。1992年には戸山庁舎へ移転、1997年には国立感染症研究所（National Institute of Infectious Diseases）に改称しました。移転の際は、予研とともに国立健康・栄養研究所、国立医療・病院管理研究所の三研究所が、国立病院医療センター（旧国立国際医療研究センター）の隣接する戸山の国有地に移転しましたが、その際には、三研究所が国立病院医療センターと協力して、臨床医学と基礎医学の連携を強化し「総合的医学研究センター」として国民の健康のために大いに働くことが示されました。この「総合的医学研究センター」はJIHSの掲げるビジョン「世界トップレベルの感染症対策を牽引する『感染症総合サイエンスセンター』」に通ずるものと考えます。

NIIDの業務は国内外との保健医療機関との連携が極めて重要であり、WHOなどの国際機関、地方衛生研究所等と強固な協力体制を築いてきました。それらが、JIHSの活動の礎にもなるものと思います。

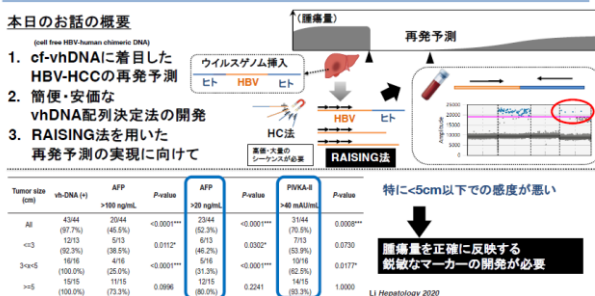
JIHSは感染症を含むあらゆる健康危機に対応していくことになります。NCGMは二つの総合病院と研究所で幅広い疾患の臨床、研究領域に対応しているにとどまらず国際保健医療協力や看護人材の育成など多様な事業に多様な人材で取り組んでいます。NIIDとNCGMの統合により、次の感染症パンデミック時には感染症専門家だけでなく、多様な専門性による対応が期待されています。

予研創設時の「総合的な医学研究所」へ発展との構想（夢？）をJIHSで果たすことも期しつつ、日本の健康危機対応能力がより柔軟で強靱なものとなすべく努力してまいります。

基礎と臨床の融合で革新医療を切り拓くー第1回肝炎・肝癌勉強会開催（寄稿）総合研究開発支援局 研究管理部長 山田 康秀

JIHSは世界水準の研究体制を確保し、基礎研究、シーズ開発、臨床試験を戦略的に推進する組織を目指しています。2025年4月21日、脇田隆字局長（総合研究開発支援局）と四柳宏理事（研究連携推進担当）の主導のもと、第1回肝炎・肝癌勉強会が開催されました。臨床側からは國土典宏理事長、青柳信嘉院長（国立国府台医療センター）、稲垣冬樹診療科長（国立国際医療センター肝臓外科）ら、基礎側からは五十川正記ウイルス第二部長ら、計17名が参加しました。ウイルス第二部の若江亨祥主任研究員は「肝癌におけるセルフリーDNAによる再発早期予知と臨床開発の可能性」をテーマに発表し、双方から実施可能性、課題、解決策について活発な議論が交わされました。本会議は毎月継続開催することが確認され、今後はワクチン開発、AMR等についても臨床・基礎合同で勉強会を開催する予定です。

本日の概要 / 現行のHCCマーカーの問題点



4/4、JIHS設立記念式典を開催しました

令和7年4月1日、国立感染症研究所と国立研究開発法人国立国際医療研究センターが統合し、「国立健康危機管理研究機構（Japan Institute for Health Security : JIHS）」が発足しました。これを記念し、4月4日（金）、設立のご披露とご挨拶を兼ねた「国立健康危機管理研究機構 設立記念式典」が開催されました。

式典は、国立健康危機管理研究機構 武井貞治理事による開式の辞にて幕を開けました。

続いて、国土典宏理事長よりご挨拶があり、「感染症有事に備え、国民の皆様が安心して暮らせる社会の実現に寄与すること」が本機構の使命であることが述べられました。

その後、福岡資麿厚生労働大臣（代読）と赤澤亮正感染症危機管理担当より式辞を賜りました。



福岡大臣の式辞では、JIHSが政府に対し科学的知見を提供する新たな専門家組織として、感染症有事における初動対応力の強化、研究開発力の充実、健康危機時の臨床機能の強化、人材育成や国際協力の推進といった多様な役割を担うことへの大きな期待が語られました。



赤澤大臣は、「JIHSが設立されたことを大変心強く思っている」との言葉とともに、「国土理事長・脇田副理事長をはじめとする役員のリーダーシップのもと、JIHSがその期待される役割をいかに発揮されるよう、政府としても緊密に連携してまいります」との力強いお言葉を寄せられました。



また、来賓祝辞として、松本吉郎日本医師会会長からは、「緊急時に機能を発揮できる人材体制と組織の確立が重要であり、日本医師会としてもJIHSとの有機的な連携を図りながら、感染症対策を一丸となって進めていきたい」とのご挨拶をいただきました。

式典には、各方面から数多くの祝電も寄せられ、JIHSの門出に対する厚いご支援とご期待をいただきました。



式の終盤には、壇上にご来賓の皆さまとJIHS代表者が登壇し、開所を記念したテープカットが華やかに行われました。



最後に、国土典宏理事長から組織の概要について説明がありました。ここでは、統合する2つの組織（国立感染症研究所・国立国際医療研究センター）のルーツを含めた紹介のほか、国立感染症研究所の創立者・北里柴三郎先生、国立国際医療センター名誉総長・森鷗外先生が共に所属していたロベルト・

・コッホ研究所への言及、そしてJIHSへとつながる組織の歴史、設立の経緯、さらにミッション・ビジョン・コアバリューおよび4つのメイン機能について紹介されました。最後に、組織の合併によって新たなシナジーが生まれることへの期待が語られました。

閉式にあたっては、脇田隆字副理事長より閉式の辞が述べられ、式典は盛会のうちに幕を閉じました。

今後、JIHSが感染症危機管理の中核として国内外で重要な役割を果たしていくことが期待されます。

清瀬の風

国立看護大学校で卒業式・修了式が開催されました

(寄稿)国立看護大学校

春の気配が感じられる3月21日、佐々木厚生労働省大臣官房危機管理・医務技術総括審議官、国土理事長、澁谷清瀬市長はじめNCGM、各ナショナルセンターなどからのご来賓列席のもと、卒業式・修了式が開催されました。

卒業証書、修了証書、学位記が、萱間大学校長から一人ひとりに手渡されました。



萱間大学校長式辞

萱間大学校長は式辞の中で、本学の学修で培われた卒業生・修了生の高い資質に信頼を寄せ「看護職として提供するケアは、ケアを受ける人が心から安心できるケアを提供できたときに、提供する人との間で完成する。人口減少、超少子高齢社会で医療を持続可能にするためには、これま

での手順を見直し、効率化することが必須であり、皆さんには、先輩方を心から尊敬しつつ、変えるべきものと変えられないものを見分け、創造していくことが期待されている」と述べました。

国土理事長からは、「NCGMは、国立感染症研究所と統合し、JIHSとして新たに出発する。JIHSに就職される方々は、新たな組織として初めてお迎えする方々であり、JIHSの初代理事長として、皆さんを心から歓迎申し上げるとともに、一緒に仕事ができることを大変嬉しく思っている」との祝辞をいただきました。



国土理事長祝辞

卒業生答辞では、「オンライン授業から始まり、対面での学習や実習を通して、仲間と協力し合いながら看護師としての資質を高めてきた。実習での経験や患者様との関りは、私たちの看護観を形成し、自信へとつながった」と述べた上で、「教職員、実習を受け入れてくださった病院関係者、地域の皆様、また、感染症流行下の実習で、学生から感染するリスクへの不安がある中でも、受け持ちを承諾してくださった患者様とご家族様に対して改めて御礼申し上げます」と自分たちの学修を支えてくれた方々への感謝の言葉が述べられました。

卒業生の多くは、JIHS及びナショナルセンターで医療者としての道を歩み始めます。現場の皆さま方には、厳しくも温かなご指導を通じて、

看護師・助産師としての成長を支援していただくようお願いいたします。



佐々木審議官祝辞



澁谷清瀬市長祝辞

令和7年度国立看護大学校入学式が開催されました

(寄稿)国立看護大学校

桜満開の4月9日、国土理事長をはじめとした厚生労働省、国立健康危機管理研究機構（JIHS）、ナショナルセンター関係者のご臨席のもと、JIHSに移行して初の国立看護大学校入学式が開催されました。

式辞で萱間大学校長は、「入学まで志を持ち続けてこられたことの背景には、きっと熱い思いがあることと思います。臨床現場では、多くの卒業生が活躍しています。現場の素敵な先輩方をモデルに歩み、これからの医療を共に担ってください。皆さんの力が必要とされています。」と述べました。



萱間大学校長式辞



国土理事長祝辞

国土理事長からは、JIHSが担うミッションについて述べられるとともに、「皆さんは、JIHSとして初めてお迎えする学生。初代理事長として皆さんを心から歓迎いたします。大学校生活を通じて、様々な人々の気持ちが理解できる医療職になってください。」とのお言葉をいただきました。

また、入学生代表からは、「これからの学生生活、知識・技術・そして豊かな人間性を育み、仲間と共に学びを深めて参りたい。」との宣誓が述べられました。



入学生代表宣誓



今回の入学により、看護学部第25期生112名、研究課程部前期課程第21期生8名、研究課程部後期課程第11期生4名の計124名が、看護大学校で新たに学び始めます。

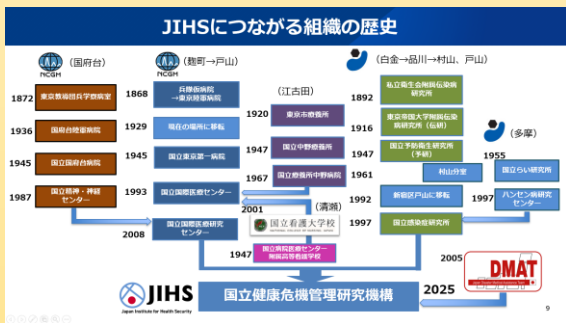
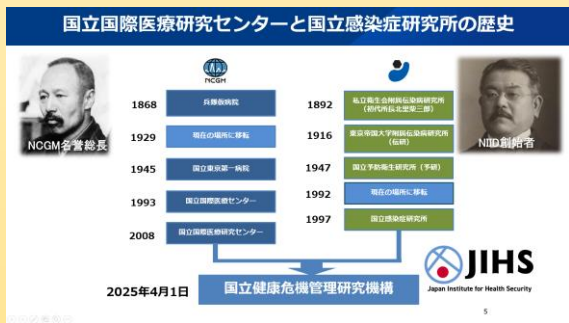
4月1日、新年度にあたり、約400名の新入職員をお迎えしました

4月1日、令和7年度の始まりにあたり、国立健康危機管理研究機構（JIHS）では、新入職員をお迎えしました。

当日は研修棟の4階および5階において新入職者向けのオリエンテーションが実施され、5階の大会議室には、その大多数を占める約170名の看護師の皆さんが一堂に会しました。

入職式では、国土典宏理事長による祝辞（※事前収録映像）が上映され、「本日発足する新しい組織の新職員として皆様を迎えることが大変うれしく思います」と、新組織に加わった職員一人ひとりを温かく迎える言葉が贈られました。午後には理事長ご自身が対面にて改めて祝辞を述べ、職員一同を代表して新たな仲間への歓迎の意を伝えました。

理事長の挨拶ではまず、JIHSの前身である国立感染症研究所（NIID）と国立国際医療研究センター（NCGM）の歴史について紹介がありました。また、NIIDの創立者である北里柴三郎先生、NCGM名誉総長である森鷗外先生が共に所属していたロベルト・コッホ研究所にも言及され、医療と公衆衛生の分野における歴史的背景が紹介されました。



さらに、JIHSの設立に至る組織の歩みについても説明がなされ、組織の成り立ちと背景に理解を深める機会となりました。

JIHSの果たすべき主な機能は4つあり、それぞれのミッション、ビジョン、そして行動指針となるコアバリューについても丁寧に紹介されました。

最後に、理事長は「新しくスタートした組織として、職員みなで力を合わせて頑張っていきましょう」と呼びかけ、新たな一歩を踏み出す職員へ力強いエールを送りました。

新入職員の皆さんのこれからの活躍を、職員一同心より応援しています。

MISSION
JIHSの使命

感染症その他の疾患に関する調査・研究の実施や医療の提供を通じて安心できる社会の実現に貢献する

VISION
JIHSの未来像

世界トップレベルの感染症対策を牽引する「感染症総合サイエンスセンター」として、基礎、臨床、疫学、公衆衛生にわたるすべての領域研究を統合的に推進し、最先端の医療と公衆衛生対策を提供する

CORE VALUE
JIHSの価値

Global	常に世界的な視野で
Resilient	強くしなやかに
Innovative	革新的に
Integrity	公正かつ誠実に
Professional	高度な専門性に基づき

職責を果たしてまいります。



ミャンマー中部で発生した地震支援に参加して —国際緊急援助隊医療チームの活動報告

大場 次郎(危機管理・運営局 DMAT事務局 国際対策課 国際対策専門職 医師)
千島 佳也子(災害等危機管理対策第一課 保健医療福祉調整担当専門職 看護師)
豊國 義樹(災害等危機管理対策第一課 災害等危機管理対策専門職 業務調整員)
武田 徹(ブロック担当第一課 ブロック企画担当第一係長 看護師)

2025年4月、ミャンマー中部地震対応に、私たち4名はJICA国際緊急援助隊（JDR）医療チームの一員として、被災地マンダレー市で診療支援にあたりました。連日40度を超える酷暑の中、20日間で約2,100名以上の方々の診察を行いました。外傷だけでなく、既往症の悪化や妊婦、小さなお子さんの健康相談にも対応しました。医師、看護師、臨床放射線技師、通訳の方々など、多職種が連携し、限られた時間と資源の中で、できる限り丁寧であたたかい医療を届けました。

現地の医師や通訳の方々と力を合わせた診療は、単なる治療にとどまらず、信頼の輪を広げていくものでした。ミャンマー語でのあいさつ、現地の衣装や伝統的な顔料（タナカ）を身につけることも、私たちにできる“心を届ける医療”の一部だったと感じています。その姿勢が伝わったのか、多くの住民が安心して受診され、私たちも「この地に受け入れてもらえた」という手応えを感じることができました。



伝統的な顔料(タナカ)を身につけて
現地で診療にあたる大場医師



DMAT 1次隊 通訳の方々と集合写真

今回の活動では、これまでのDMATでの災害支援の経験が随所で活かされました。そして、仲間と共に汗をかき、目の前の患者さんの笑顔に励まされながら進んだ日々は、医療者としての原点をあらためて思い出させてくれるものでした。



厚生労働省委託事業：感染症危機管理リーダーシップ人材育成事業
令和7年度 感染症危機管理リーダーシップ研修(長期)
開会式が4月17日に執り行われました
(寄稿)危機管理・運営局 企画調整部 上級研究員 佐藤 瞳



令和7年4月17日（木）、国立健康危機管理研究機構にて「感染症危機管理リーダーシップ研修（長期）」の開会式が開催されました。滋賀県および神奈川県から1名ずつ、合計2名の研修生を受け入れました。

感染症危機管理リーダーシップ研修とは？

将来の感染症危機時に、地域における対応でリーダーシップを発揮できる人材を育成することを目的に、地域の感染症危機管理においてリーダーシップを発揮できる人材に求められる能力（コンピテンシー）を習得するプログラムとなっています。

コンピテンシー： リーダーシップ系統

大項目	中項目	説明
感染症危機において、迅速に戦略と方針を決定し、実行する能力	戦略策定・意思決定する能力	大勢の動きや状況を読み取り、時間と情報に基づいた正確な意思決定の下で、緊急事態を把握、対策の迅速な決定と実行し、意思決定の責任を担う能力
	課題を明らかにし解決する能力	課題を明らかにし、危機時の状況変化に応じて解決する能力
	合意形成に導く能力	関係機関や関係者の間で合意形成や意思決定を促進し、関係機関の意思決定を調整、解決し、合意形成に導く能力
感染症危機において、人材・組織を管理する能力	リスクコミュニケーション能力	外部（住民、関係機関）及び内部（関係者）に対して、リスク認知を共有し、適切な対応やリスクコミュニケーションを促進し、関係者の協力を得る能力
	組織を管理・指揮する能力	様々な組織の特性や活動の理解し、適切なチームを構築し、目的・目標を共有し、チーム内の協力や調整を促進し、組織の能力を最大限に発揮し、危機時に必要な能力
	人材を育成する能力	感染症危機時に対応できる人材を育成する能力、また適切な能力開発の機会を提供する能力
感染症危機における自らの行動・意思決定を調整し、判断する能力	自己を分析・認知・管理する能力	自身の感情や行動の理解し、必要に応じて感情や行動を調整し、適切な判断や行動を促す能力
	共感力・社会性	他者の感情や行動を理解し、必要に応じて感情や行動を調整し、適切な判断や行動を促す能力
	的確な情報を求め、伝達する能力	必要な情報を求め、伝達する能力、また適切な能力開発の機会を提供する能力

※令和5年度厚生労働科学研究（国士班研究（23HA2016））で作成したコンピテンシー案を踏まえて、厚生労働省が再定義

コンピテンシー： 専門性系統

項目	説明
公衆衛生総論	公衆衛生に関する概念や原則を理解していること
疫学	サービスの提供も含め、疫学に関する概念や原則を理解していること
行政	行政、制度や、地域の危機管理における関係者の役割や関係、及びそれに基づく組織の在り方、役割を理解していること
感染予防	感染予防に関する概念や原則の理解していること
検査	検査に関する概念や原則の理解していること
行動科学	地域の危機管理において必要と、地域住民の特性理解、行動科学に関する概念や原則の理解していること
リスクコミュニケーション	リスクコミュニケーションの概念や原則の理解していること
統計・データサイエンス	統計に関する概念や原則の理解していること、データの適切な収集・解析に必要となる手法の理解していること
診断・治療	診断・治療に関する概念や原則の理解していること
医療評価	医療評価に関する概念や原則の理解していること
検査	検査に関する概念や原則の理解していること
臨床研究	臨床研究に関する概念や原則の理解していること
平時の機能整備	平時における対応を見直し、平時の機能整備の重要性や、平時の機能整備の理解していること
有事の組織管理	有事において、適切な組織管理の重要性や、有事の組織管理の理解していること
情報管理	地域の危機管理において必要と、地域の危機管理の重要性や、地域の危機管理の理解していること

※令和5年度厚生労働科学研究（国士班研究（23HA2016））で作成

令和7年度研修生

小林 亮太 滋賀県 東京本部



この研修を通して健康危機管理に関する知識を深めるとともに、行政や医療機関など多様な各所の関係機関などとの調整・マネジメントといった現場で日々求められるスキルの習得に努めてまいりたいと思います。

森岡 美香

神奈川県 健康医療局 保健医療部 健康危機・感染症対策課



感染症危機は私たちの社会において、予測不可能に発生するものということをもっと体験をいたしました。その時々で迅速かつ適切な対応が求められるということを感じております。多くの方と意見交換をさせていただいて、ネットワーク作りが出来ますことを大変楽しみにしております。

開会式の様子

本研修に携わる先生方が、研修生に向けた言葉を語りました。

厚生労働省 健康・生活衛生局
感染症対策部 部長
鷺見学先生

組織の意思決定や関係機関との調整等に必要なリーダーシップやマネジメント、コミュニケーションなどの、感染症危機時に必要な分野横断的な能力や知識を、ぜひ学んでいただきたいと思います。

国立健康危機管理研究機構
副理事長
脇田隆字先生

地域での感染症ネットワークの形成は、今後の感染症対策において非常に重要な役割を果たすと考えております。

国立健康危機管理研究機構
理事長
國土典宏先生

本研修で学んだ内容をご自身の自治体に持ち帰っていただき、地域の感染症危機管理対応能力の向上に寄与していただくことを切に願っております。

全国保健所長会 会長 /
福岡県久留米市保健所 所長
藤田利枝先生

健康危機時にはコミュニケーション力が非常に重要になりますので、研修全体を通して積極的に意見を述べ、質問をして、議論を交わして、研修を満喫し、人脈を広げていただきたいと思います。

国立健康危機管理研究機構
国立国際医療センター
国際感染症センター長
大曲貴夫先生

実習・OJTの中ではパートナーの業務内容を知ったり、技術的な内容を知るといことも非常に重要なので、色々なパートナーの方々はどうやって動かれているのかというのは非常に参考になると思っています。



厚生労働省 健康・生活衛生局
感染症対策部 部長
鷺見学先生



国立健康危機管理研究機構
理事長
國土典宏先生



国立健康危機管理研究機構
副理事長
脇田隆字先生



国立健康危機管理研究機構
国立国際医療センター
国際感染症センター長
大曲貴夫先生



全国保健所長会 会長 /
福岡県久留米市保健所 所長
藤田利枝先生



研修生と本研修に携わる先生方が、開会式会場にて集合写真を撮影しました。



感染症危機管理対応を行う地域のリーダーシップ人材育成のための
感染症危機管理リーダーシップ研修

厚生労働省委託事業: 感染症危機管理リーダーシップ人材育成事業



SIP第3期 公開シンポジウムを開催

— 統合型ヘルスケアシステムの構築における生成AIの活用 —

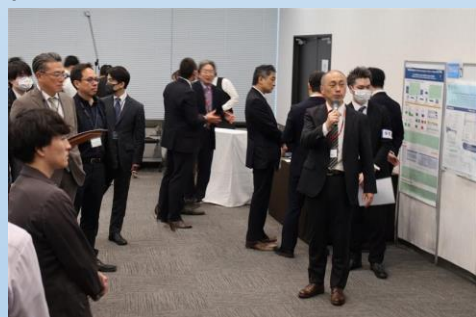
4月30日、戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）第3期「統合型ヘルスケアシステムの構築における生成AIの活用」に関する公開シンポジウムを開催しました。会場とZoomライブ配信のハイブリッドで開催し、700名を超える参加者を迎え、大盛況のうちに終わりました。

当日は、武井理事による開会挨拶と、国土理事長からの主催者挨拶に続き、自治医科大学学長であり本事業プログラムディレクター（PD）を務める永井良三先生より、事業の概要とこれまでの取り組みの振り返りが行われました。

その後、8名の研究開発責任者より、生成AIを活用した医療分野における研究テーマと成果について発表がありました。これらの研究では、診療支援や病院運営、災害時対応など、さまざまな場面における生成AIの応用可能性が示され、参加者からも高い関心が寄せられました。



続いて実施されたパネルディスカッションでは、「国産医療LLM/LMMの社会実装に向けて」をテーマに、本事業の関係者による活発な議論が交わされ、今後の技術活用に向けた展望や課題について共有がなされました。



さらにNight Sessionでは、今回のプロジェクトで開発された医療用生成AIモデルやアプリケーションを直接ご覧いただきながら、研究開発チームとの意見交換を行う貴重な機会となりました。

今回のシンポジウムを通じて、生成AIの医療分野への応用が着実に進んでいる

ことが実感されるとともに、今後の社会実装に向けて、さらなる連携と実証が求められることが再確認されました。

シンポジウム当日の動画およびプログラムは、JIHSの[SIPウェブサイト](#)にて公開しておりますので、是非ご視聴ください。

戦略的イノベーション創造プログラム（SIP）とは

内閣府に設置された総合科学技術・イノベーション会議（CSTI）が司令塔機能を発揮して、府省の枠や旧来の分野を超えたマネジメントにより、科学技術イノベーション実現のために創設した国家プロジェクトです。真に重要な社会的課題や、日本経済再生に寄与できるような世界を先導する課題に取り組んでいます。

JIHSは、令和5年度から課題「統合型ヘルスケアシステムの構築」の研究推進法人を務めています。

AYA世代がん患者を応援するAYA Weekのイベントが開催されました

(寄稿)AYA支援チーム

AYA世代とは、Adolescent and Young Adult (思春期・若年成人)の頭文字をとったものです。AYA支援チームは多職種で構成され、AYA世代が抱える様々な悩みや困り事の相談に対応すべく活動しています。がんは高齢になるほど増える病気ですが、国内では15歳から39歳までのAYA世代でがんと診断される方が毎年約2万人います。しかし、AYA世代のがん患者への理解や支援は十分とはいえません。



AYAweek アトリウム展示（応援フラッグ）

AYA weekはAYA世代のがん患者に対する社会の理解と支援の輪を広げる1週間で、全国の医療施設などで毎年3月にさまざまな啓発イベントが開催されています。当院でも3月7日～3月17日まで、アトリウムにて、応援フラッグポスター、ART作品、各種資料などを展示し、AYA世代がん患者への理解を深める活動を行いました。

さらに3月8日には、AYA世代がん患者のドキュメンタリー映画「ケアを紡いで」の上映会、3月11日には小児がん経験者の移行期医療について考える市民公開講座を開催し、3月14日には親ががんになった子どもとその家族を支援するために設立されたNPO法人Hope Tree代表理事の大沢かおり先生に「がんになった親とその子どもへのサポート」について講演していただきました。イベント参加者からは、「大変貴重な情報と気づきがあり、とても参考になりました。」などの感想が多数寄せられました。今後もAYA世代の患者が希望を持ちながら過ごしていけるよう応援していきたいと思います。



映画上映会「ケアを紡いで」



AYA支援チームメンバーと応援フラッグ

国立音大附属中学校合唱部OGの皆さんによる合唱コンサートが開催されました

(寄稿)医療の質向上委員会

医療の質向上委員会では、患者さんを『元気づける、癒しや楽しみ』を合言葉にボランティアコンサートを定期的に行っています。3月14日には全国大会にも出場経験があり、数々の受賞歴のある国立音大附属中学校OGの皆さんによる合唱コンサートが行われました。国立音大附属中学校合唱部の皆さんは、新型コロナウイルス感染拡大の中で医療従事者が大変困難な状況に直面していた際に、休校中にも関わらず『いのちの歌』をリモート合唱で届けてくださり、その歌声に多くの職員が癒やされ、とても勇気づけられました。今回のコンサートでは、その感謝の気持ちを込めて、感謝状を贈呈いたしました。

合唱コンサートでは、明るく清らかな歌声が素晴らしく、合唱団オリジナルの振付け曲では患者さんも体を動かしながら一緒に歌っていました。患者さんからは、「美しい歌声に感動し涙が出た。癒され、元気をもらえた！病院で合唱を聴けるなんてとても嬉しい。今日、治療頑張ってきて良かった」など感謝の声を沢山頂きました。会場に来られない患者さんは、病棟でリモート参加されました。患者さんもスタッフも音楽に癒やされ、会場の雰囲気を感じることができ、とても喜ばれていました。これからも日常のなかの癒しの一時として、皆さんの心に届く演奏会になるよう努めてまいります。



参加者：約120人（会場 約100人、オンライン視聴 約20人）

国府台病院診療科 シリーズ No.4

児 童 精 神 科

国府台病院児童精神科は、昭和23年に開設され、長年にわたり、幼児から中学生までのお子様の心の疾患に特化した医療を提供しています。児童精神科は、外来診療に加え、45床の専用病床（精神科開放病棟）を有する入院診療を行っています。また、入院児童を対象とした市川市立小中学校の院内学級が併設されています。主な治療対象は、不安障害、うつ病、摂食障害、注意欠陥・多動症（ADHD）、自閉スペクトラム症、強迫性障害、転換性障害、解離性障害、心的外傷後ストレス障害などです。

近年は、不登校やひきこもり、摂食障害、発達障害など、様々な疾患を背景に受診される児童が増えています。児童精神科の治療は、主として外来での精神療法となりますが、必要に応じて入院治療を導入いたします。入院治療では、自然豊かな病棟の中で多職種による関わりと院内学級との連携により、精神疾患の治療だけでなく、子どもものの心の成長を目指しています。特に、社会参加の経験を増やすことを目的とした活動集団療法（遠足やキャンプなど）に力を入れています。



（児童精神科診療科長 宇佐美 政英）

■関連サイト (Youtube) : [子どものこころラボ【国府台病院児童精神科】](#)

4月25日「世界マラリアデー」

2025年の世界マラリアデーのテーマは、「Malaria Ends With Us: Reinvest, Reimagine, Reignite.」です。世界マラリアデーを記念し、熱帯医学・マラリア研究部では、国立国際医療センター中央棟アトリウムで、マラリアの流行状況や同研究部の活動報告に関するポスター展示を行いました。



展示では、狩野熱帯医学・マラリア研究部長による力強い「書」も披露され、今年の漢字として「**走**」が掲げられました。「JIHS熱帯医学・マラリア研究部は我が国の感染症危機管理体制強化をはかりながら、世界のマラリア撲滅に向けて走り続けます。」と力強くコメントしました。

「兵庫からセラピードッグがやって来た！」

～5年越しの想いが実った嬉しい日～

(寄稿)子どもの療養環境に関するワーキンググループ

「わんっ！ わんっ！」何日も前から楽しみにわんちゃんの写真がついた手作り玩具を引っ張り、お散歩をする小さなこども達・・・。



当日は大興奮で歩き回り、わんちゃんとフラフープをくぐり？最後はわんちゃんと一緒にマットでゴロゴロ寝転ぶ1歳、2歳ちゃんの姿がありました。そして、付き添いのご家族は少しだけこどもと離れてわんちゃんと触れ合い、ご自身の時間を過ごしました。静かにわんちゃんの背中に触れ、ゆったり時間が流れるお姉さんの時間、遠くのソ

ファーからずっと様子を眺めるお兄さんの時間、それぞれの時間がありました。

小さなお子様から高校生まで、付き添っているご家族やスタッフ達ひとりひとりが柔らかい空気に包まれ、プレイルームに笑い声が響く一日でした。

当院では、2019年頃からセラピードッグの導入を検討しましたが、コロナ禍となり、対面での導入は実現しませんでした。しかし、オンラインイベントの形式を取り、日本レスキュー協会の犬達との交流を5年に渡り続け、「能登半島地震」後には実際に現地で活動した災害救助犬の様子を写真と共にご紹介いただき活動を継続してきました。



何も言わずにそっと寄り添ってくれる犬の存在は癒しとなり、また



頑張る勇気を引き出し、心の支えとなることが期待されます。犬との時間は受け身になりがちなこども達がありのままの自分でいられる心の居場所を作ります。セラピードッグが持つ特別な力、そのぬくもりに触れる経験は他に代わる物のない癒しや安心をこども達の心に届けます。

「また会いたい！」という気持ちは明日への頑張りを支える効果が期待されます。

今回の開催を病院内での理解、支援の足掛かりとし、継続的なセラピードッグイベントの開催を目指していきたいと思います。

新しいチャレンジを見守り、支えてくださった小児科を超えた他部署、多職種の皆さまに感謝いたします。



■ 日本レスキュー協会について
<https://www.japan-rescue.com/>

NEWSLETTER

国際医療協力局約40年の歴史をまとめた特別号が完成しました

国際医療協力局は、グローバルヘルスに関する様々な話題を一般の皆さまに提供し、国際医療協力局の機能や役割、政府開発援助の意義、ひいては世界の健康課題に関心を寄せていただくことを目的に、「NEWSLETTER」を不定期に発行しています。

このほど「国際医療協力局と健康危機対応」特別号が完成しました。今号はJIHS発足を期し、健康危機対応に関する国際医療協力局のこれまでの活動と歴史を、過去の記録や写真、関係者へのインタビューやコラムとともにふりかえっています。

グローバルヘルスとの新たな出会いに役立ちましたら幸いです。



[こちら](#)をクリックして
ご覧ください

健康危機に立ち向かう ～新機構発足にあたって～

(寄稿)国際医療協力局 運営企画部長 蜂矢 正彦

1986年に創設された国際医療協力局は、これまで低・中所得国の保健医療を改善させるために、JICAやWHOなどの専門家活動に加え、研究や研修事業を行ってきました。具体的には、2025年3月までに161か国に6,200回以上の海外派遣、139か国から6,400人以上の研修生を受け入れた実績があります。原稿執筆時点では、7か国に10人が保健医療専門家として1年間以上長期滞在し、相手国や地域のために様々な課題に取り組んでいます。今年度はさらに6人が海外赴任する予定です。



パプア・ニューギニアにて、調査メンバーと研究打合せ

健康危機にどのように立ち向かうべきか？という問いに対して唯一の答えがあるわけではありません。しかしモノがない、情報がない、人がいない、という低・中所得国で課題に向き合ってきた経験は、日本国内で健康危機が発生した際にも必ず生かせると思います。新組織JIHSの一員として、これまで以上にがんばっていきます。

国際庭園の様子

当院の敷地内にある「国際庭園」は、来院・入院される皆さまの憩いの場として親しまれています。この庭園では、長年にわたりボランティアの皆さんが季節ごとにお花の植え替えや草むしり、手入れを丁寧に行ってくださいしています。

年間を通してさまざまなお花が咲き誇る中、4月は色とりどりのチューリップが満開を迎え、訪れる方々の目を楽しませてくれました。

お越しの際には、ぜひ足を止めて、花々の彩りに癒されるひとときをお過ごしください。



本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。



企画・発行：
JIHS 広報管理部



https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。